

# 天神川の白い砂

吉田宏子

田舎の堤防を孫が祖母と歩いていく。

一日に何本かのバスが通る部落一番の繁華街、その鍛冶屋兼何でも屋に買い物に行く私に、ひとりの使いは寂しかりうと祖母がついてきた。祖母は名をマスと言った。濃紺の緋のもんぺ姿の祖母と、おかつば頭の孫。堤防からは一面の菜の花畑と、笹藪越しにとうとうと流れる川が見えた。

茅野からはうるさいほどの小鳥のさえずりがしていた。春の堤防はひとつこ一人通らない。私は祖母といっただけで嬉しかった。

産褥熱で倒れた母に替わって、私は祖母に育てられた。私の小学校入学を機に、家族はともに暮らすようになったが、両親には遠慮があった。

堤防の中ほどまで来た時、それまでいろいろなことを喋っていた祖母が急に真顔になり「トットリケントウハクグンナガセムラ」と祖母の生れ故郷の住所を口にした。初めて聞く詳しい所番地だった。そして「宏子は、木下の家の子になるか」とひとり言のようにつぶやいた。一度も村を出たことのない子にとっては、すべてが遠い異国の話、ひと言ひと言を受け止めるだけで精一杯だった。

最後に祖母は「人を呪えばあなふたつだよ。お天とうさまはちゃあんと見ていなさるからね」とつけ加えた。祖母の母親は、後添えにはいった先で祖母を産んだ。その家には二才違いの義理の姉がいて、この義理の姉を祖母はよくいじめた。父親が選んで買い求めてきた簪や下駄を、わざと横取りしたり、隠したりもした。その天罰があったって、自分は生まれ故郷に帰ることなく、遠い東北にいと語った。望郷の思いに騒ぐ胸を静めるには、こう思うしか方法はなかったのだろう。誰を責めるのでもない。この話をした時の祖母の年令は六十才、老いの寂しさが沁みしてきた。「木下」は祖母の旧姓、孫を連れ帰って実家の家を継ぐことも考えた。今ならまだ間に合うと……。

私は何もわからないまま「トットリケン……」を呪文のように心で唱え、意味も分らないままあなふたつをおぼえた。祖母と孫を繋ぐ、大事な暗号を忘れるわけにはいかなかった。

祖母の望郷の思いは少しずつ形を変えていった。

当時、村の埋葬は土葬で、川沿いの土地は掘るほどにどろどろの泥と水がでた。

「泥の中に入るのは厭だね」祖母はこの地の土葬を嫌った。そして最後は

「小さい頃はよく天神川で泳いだものさ。さらさらの砂の上を裸足で歩いていくんだよ。このように、泥が足につくことなんてなかったさ」

故郷の白く輝く砂を懐かしがった。細かい井桁がすりの仕事着に、腰には手ぬぐいを下げ、当時にしては背が高く、腰もしゃんとして元気がよかった。駆け落ち同然で故郷を出て、祖父の母の姉を頼りに当時景気よかった小樽へ渡った。そこで祖父の姪を養女にして婿をとり、孫の私を育て、婿である私の父の故郷の宮城県へと渡ってきた。関東大震災にもあう波乱の人生を嘆くでもなく、強気で生きていた。愚痴を聞いたことなどなかった「これはキヨ（母の名）のコートの布、これはおじじ（祖父）の背広の布」

バスケットを開けては昔を語り、箆笥から絹の小袋を取り出し、珊瑚やべっ甲の簪や帯止めを並べては若い頃を懐かしがった。

高校に入学し私は家を離れることになった。就職し落ち着いたら、祖母を呼び寄せて一緒に暮らすつもりでいた。若いということは愚かで、祖母の明日は永遠とはいかないまでも、まだ続くものと錯覚していた。寝込んだことのない丈夫な人だった。私が十八才で就職した年に祖父が亡くなって、気が折れてしまったのだろうか。祖母の一年の重みを分かかってあげられなかった。私が二十四才の時に七十七才で亡くなって、あんなに嫌っていたどろどろの泥の中に葬られた。

床屋に行けば「宏子の鼻の下には剃刀をあてなくてくれ、前髪は短くしてくれ」と言い置いてある。セーターを買えば、私には純毛、妹には化繊、といった具合で、家の中はよくもめた。それほどの祖母の愛情、恩に私は何も答えていない。後悔が残った。

結婚し、転勤、子育てと現実には追い回される暮らしの中で、祖母に対する思いも少しずつ薄らいでいった。

ところが、転勤生活も最後というところで、私は思いがけないことでもつまずいた。

六年生の子どもの担任が、プールの時間に女の子の前でわいせつ行為をした。教育委員会に言う、言わないでクラスは揺れた。私には信じられなかった。

夏休み明けには、市をあげての小学校連合体育大会があり、子どもたちの練習は厳しさを増していた。家の子は学校代表のひとり選ばれ、この担任の指導の下、好成績を出し、大会本番が期待されていた。地方都市の伝統校は、勝つことが要求される。

担任は地方からひき抜かれた赴任二年目の、五年からの持ち上がりクラスのまかさ  
れていた。スポーツの苦手な先生方には苦しい行事だったろう。このような時の事件  
だった。

先生同士の確執、父兄間の妬み、根は深く、最後は「先生がプールの時間に……  
した」と私が言っていると担任に電話をする人までいて、担任は狂乱状態、子どもに  
当たってくる。言ったものの勝ちではないはず、身を守るためにはこれしかない、  
私は会話を録音した。妬まれるなど無縁な地味な家族である。ここに留まる意味を考  
え、残り少ない任務の夫を残し、私たちは故郷に帰る道を選んだ。

ところが問題はここで終わらなかった。越してきた先の周りの人たちの態度がおか  
しい。嫌がらせがひどい。転校書類に原因があるとか考えられず、子どもが通って  
いる学校の担任に聞いてみると「すべてひっくりかかぶされてある」という。  
聞いたが、内容は教えてもらえない。

そこで、法務局人権擁護委員会に相談した。いざとなったら録音したテープを出す  
つもりでいた。法務局人権擁護委員会の人は、早いうちなら転校書類のファイル交換  
という方法があったが、日も経っていることだし、むこうの学校の担任は、その後小  
さい学校に転任になっているということなので「それを結果だと思って、それ以上の  
深追いはしないように」という結論を出した。異存はなかった。

早速、教えてくださった子の担任にその結果を報告した。「そんな人はここから追い  
出せ」地域をあげての嫌がらせだったと後で知った。東北屈指の文化都市の人々の人  
権意識はこの程度なのか。嘆いてはられない。働きながらNHKカルチャー教室に  
通い始めた。平成二年、講師の先生にことのいきさつを話し、いろいろなことが耳に  
入り先生も不愉快でしょうが、法務局人権擁護委員会に相談し、結論をいただいでい  
る旨を話した。併せて放送大学にも通った。

気がつけば「人を呪えばあなふたつだよ」「お天とうさまはいつも見ていなさるさ」  
祖母の言葉を支えにしていた。いつかはわかる時が来る。母親は子を守るためやるべ  
きことをやった。後は子どもをしっかり育てること。子どもがまっすぐに育たなかつ  
たら、ぐうの音も出ない。

子どもも巣立ち振り返ると、祖母の亡くなった年に近づいていた。望郷の思いを幼  
い孫に洩らした祖母のせつなさが甦る。寂しさを思いやることができなかつた悔いが  
残る。

まだ体力があるうちに、祖母の生れ故郷、キラキラに輝く砂の地、天神川、祖母がとうとう果たせなかった夢、トットリケントウハクグンナガセムラに行ってみようと思立った。飛行機が嫌いなので、東北新幹線、東海道新幹線、山陰線から智頭急行を経て、念願のトットリケンに降りた。ナガセマチ役場で現在の所番地を探したが、もうそこには縁者はいなかった。

秋の天神川の堤防を歩く。時は止まったまま。三尺の赤い帯を飛ばし、下駄をほうり、天神川の砂浜を一目散に駆ける幼い頃の祖母の姿が浮ぶ。

昔はもっと細かい砂が水辺まで続いていたのだろうが、天神川は岸辺までびっしり雑草が育ち砂浜の面影はない。のぞけば川べりは深く切り込んで、水面が大きくたゆとう。探すと、雑草の茂った傍らに石ころまじりの砂地があった。私はそこの砂をかき集め袋に詰めこんだ。堤防を上がると、小鳥の音がする川前の畑で、農作業に励む老夫婦がいた。この地を離れなかったら、祖母もこのような日々をおくっただろうか。何十年と変わらない農家の営み。川辺の風景は穏やかそのもの。帰りしな、天神川が流れるほつりを歩きながら、深い感慨をこめて、近くの家を二軒一軒のぞいたら、長年の風雪にさらされたか、あたり一面さらさらの白い砂があった。

帰ってきて墓参りに行った。

「マスさん、マスさんが焦がれた天神川の砂ですよ。やっとマスさんの夢を果たすことができました」

天神川のサラサラの白い砂とはいかなかったが、小石まじりの黄土色の砂を墓地の石の上に撒いた。小雨まじりの薄い陽射しの中に、薄紅の手向け花がひときわ映えていた。